楽園の薔薇

柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楽園の薔薇

【Ｎコード】
Ｎ４９６９Ｚ

【作者名】
柚葉

【あらすじ】
どこかの扉で繋がっている楽園。
その世界には闇を照らすために『薔薇』と呼ばれる人がいる。
でも、今回の『薔薇』はやる気なし！？
２人の護衛を連れて、いやでも仕事に行く。
そんな『薔薇』でも大丈夫…？
楽園の闇を照らす『薔薇』たちの、神秘的（？）な物語。

＊これは別サイトで私が「ふーちん」として書いている小説です。
盗作なんてことはないです。

プロローグ

楽園の薔薇

＜プロローグ＞

ある日。
僕は不思議な人を見た。
水色の目。
それに明るい茶色の髪。
その女の人は、野原で何かを唱え、扉を作った。
そして、その扉の中に入っていく。
扉の中はまぶしい光であふれていた。
そんなことが何日も続き、がまんしていた僕も思いきって話しかけた。
「その扉は何？」
と。
そうすると、その人は僕をびっくりした目で見つめた。
「あなた…、これが見えるのね！」
と喜びながら言う。
「あなたも、来る？楽園に。」
そう言って、僕の手を取ると、扉の中へ入った。
目を開けると、そこは自然が広がるきれいな場所。
「来てくれてありがとう。あなたには、この子を頼みたいの。」
「この子…？」
考えて、気付いた。
この子というのは、女の人のお腹にいる赤ちゃんのことだ。
「そこで、あなたに、今日生まれてもらうわ。」
その最後を聞くか聞かないかの時、僕の意識はとぎれた。

＊　＊　＊　＊　＊

「ソフィア」
その声に気付き、私は振り返る。
「ユニゾン」
「もう、終わったか？」
「ええ。今生まれたはずよ。」
その通り、建物にはどよめきがあった。
「あの子には、イスフィールの許婚になってもらうの。」
まだ生まれていないイスフィールをなでながら、私は目を閉じた。
「だからね、ユニゾン。あなたと、さっきの子…そうね、セイレーンにしましょう。その2人が中心になってイスフィールを守ってやって。この子は、この楽園にあるたった1つの薔薇なんだから。」
私の言葉に、ユニゾンは静かにうなずいた。
「たぶんイスフィールは元気な子になるだろうから、そのうち、もう1人あげる。…任せたわよ、セイレーン、ユニゾン。…イスフィール、あなたは、この世界の闇を出来るだけでいいから照らして。」
そして誰にともなくつぶやく。
「よろしくね」と。

1．二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1．二分咲きの薔薇

＜1＞

「……。朝…？」

少女は寝台の上で首を傾げた。

「今日の天気は…。」

少し右にずれ、天井に着いている窓を見上げる。

ややあって、嫌そうにつぶやいた。

「…晴れぇ～？」

実は晴れの日が大のきらい。

「雨でも降ってくれりゃいいものの…。明日は逆さのてるてる坊主でもやろうかな。」

そういいながら、机の上のペンダントを手に取った。

これは、ルビーの粉で作られた、真っ赤な薔薇の形をしている。

この楽園にたった1つのものだ。

その時、ドタドタッと、外でものすごい音がした。

少女は慣れているようにため息をつく。

そして、首にかけたペンダントを握りしめた。

これは、『薔薇』と呼ばれる者たちの特別な能力だ。

握りしめると同時に、少女の身体から、淡いピンク色のオーラが立ち上った。

しかし、少女は何かを思いついたようにペンダントから手を離す。

「やっぱ、無視した方が良いのか？」

と、つぶやいた。

その時、部屋についている最高級の扉がものすごい音を立てて開かれた。
「僕の薔薇姫！元気だったかい！？」
薔薇姫と呼ばれた少女は、額に青筋を浮かばせる。
扉を開けたのは、そこにいた少年だろう。
「セイレーン…。元気だった？ですってぇ～？昨日も来ていたじゃないの！」
少女は無視すると決め込んだはずなのに、耐えきれず文句を言う。
少年――セイレーンは、満面の笑みを浮かべた。
「やだなあ、薔薇姫。一日で熱が出るかもしれないんだよ？」
「うるさい。私は年中ずーっと元気です！」
少女の頭の中で、何かが切れる、ぶちっという音。
「だからあんたは～…薔薇姫って呼ぶなって言ってるでしょ～！！」
少女――イスフィールは大声で叫んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

エプスタイン家。
それは、この楽園にある珍しい一族だ。
その家で生まれる姫は、たった1つの薔薇のペンダントを身につけることが出来る。
身につけた者は『薔薇』と呼ばれ、楽園の闇――悪いことを封じなければならない。
そして、今回の『薔薇』は。

「あーもうっ！帰ってよ～、うっとうしいっ！」
エプスタイン・イスフィール。
「やだって僕も言ったでしょ～。」
イスフィールは、文句を言いつつ廊下を歩いていた。
遠い親戚で、許婚――婚約者のセイレーンと一緒に。

「なんで父様の所に行くのに、あんたもついてくんのよ～。」
イスフィールの周りに、どよ～んとした空気。
「いいんだってば。ユニゾンさんは僕のこと、いてもいいみたいだし。」
話しているうちにユニゾン（父）の部屋についた。
イスフィールは、セイレーンの言葉を無視して扉を開ける。
「父様！入ったから！」
普通は『入るよ』ぐらいなのだ。
けれど、イスフィールは『入ったから』。
「お、来たかイスフィール。セイレーン君も入っていいぞ。」
セイレーンはその言葉を聞き、ほらねと言うように目を細めた。
さっきのイライラが残っているせいか、イスフィールは見ないふりをして席に着いた。
セイレーンも同じように席に着く。――もちろん、イスフィールの隣。
その光景を目にしたユニゾンは、こらえきれずに吹き出した。
そのまま大笑いをする。
そんなユニゾンを、イスフィールはものすごい顔でにらんだ。
「ユニゾン、いいから話を続けろ。と言うか、話し始めろ。」
全然気付いていなかったが、ユニゾンの後ろに人がいた。

1．二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1．二分咲きの薔薇

＜2＞

「え、セイレーン…？」

その少年は、とてもセイレーンに似ていた。
イスフィールは自分の隣を見てみたが、そこにはちゃんとセイレーンがいた。
驚いた顔で。
天の助けとばかりに、ユニゾンは話を始めた。
「ああ、彼はレイアースと言ってね。セイレーン君と同じく、未来のここ――地球から来たんだ。ここの執事になってもら――」
「なんですってぇ！！」
ユニゾンが最後まで言い終わる前に、イスフィールが立ち上がった。
「あのねぇ、父様。私、執事とかいらないんだけど。」
「違うんだ、イスフィール。彼は、君の母さん――ソフィアが呼んだ人なんだよ。」
「…母様が？」
意外なユニゾンの言葉に、イスフィールは驚く。
「君は薔薇だろう？だから、その護衛もかねている。」
「それならセイレーンがいるじゃない。」
「…セイレーン君は確かにいい護衛なんだが、イスフィールが、その～、元気すぎるんだ。」
「…あ、そ。」

「で、どうして、その、レイアース、だっけ？」
セイレーンはレイアース自身に確認した。
レイアースは小さく頷く。
「どうしてお前に似ているか、だろう？」
レイアースが自分でセイレーンの質問を口にした。
イスフィールは、そんな2人を見比べることしかできない。
「ああ、それはね。」
ユニゾンが口を開く。
「2人は双子だったんだよ。」
「「「ええ――！！！」」」
レイアースも含めて、3人で驚きの声を口にする。
「確かにそっくりだけど、双子って…。」
「ユニゾン。どっちが上だ？」
レイアースが聞く。
「上？」
「どっちが兄かってこと。」
セイレーンも同じようで、ユニゾンが分からなくなったところを説明した。
「そういうことか。それは…確かセイレーン君じゃないか？」
その言葉を聞くと、レイアースは嫌そうな瞳をセイレーンに向ける。
「何だよ、その目は！」
セイレーンは、レイアースが向けた瞳に、少し引き気味になりながら、反抗する。
「いや。」
レイアースは首を振る。
ふと、イスフィールが挙手した。
「あ、私も分かる、その気持ち。これが兄だったら、すごーく嫌。」
イスフィールに『これ』扱いされたセイレーンは、頭が真っ白になる。
そんなことも全然分からないレイアースは、頷きながらイスフィー

ルの頭をくしゃくしゃとなでた。
（お、大きい…。）
レイアースを見上げて、思わず感じてしまう。
２人の身長差、約１０ｃｍ。
「まあ、そういうわけだから。レイアース君、君はイスフィールのそばについていてくれないか？薔薇は命を狙われることも少なくない。」
真剣になったユニゾンの言葉に、イスフィールは反抗するのをあきらめた。

1．二分咲きの薔薇？

楽園の薔薇

1．二分咲きの薔薇

＜3＞

「で？フルネームでなんていうの？」
部屋につくと、イスフィールはレイアースを振り返り、そう聞く。
深い緑色の瞳。
紙はその瞳に似合わない黒だった。
そんな彼を見ていると、深い色に引き込まれるような錯覚を覚える。
レイアースは、少し驚いたような顔をした後、目を閉じて吐息のようにつぶやいた。
「メイデン・レイアース」
「地球での名前は？」
またイスフィールが問うと、レイアースは少し考えるような顔になった。
「…覚えていない。というより思い出せない。」
そして、ふとレイアースが床に目を向ける。
「？」
「お前…薔薇のペンダント、つけてないのか？」
「へ？…あっ！あの時セイレーンに投げつけた後、すっかり忘れてたっ！！」
しゃがんで探し始めたイスフィールを見て、レイアースは思わず笑ってしまった。
「お前さあ…。普通投げたりしねえだろ。そんな大切って言われてるものを。しかも、護衛に向かって。」

イスフィールは、しゃがんだままレイアースを見た。
そして、また下を見る。
「大切だなんて思ってないもの…」
イスフィールがつぶやいた言葉は、意外な言葉だった。
エプスタイン家の人々は、薔薇のペンダントは神聖な物だと教えられてきたはず。
もちろん、イスフィールもそう教えられてきた。
それなのに、イスフィールは大切だなんて思うことなど、あるわけがない。
「なぜ？」
レイアースが問う。
イスフィールはやっと見つけたペンダントを握りしめて語った。
「だって、私はこれのせいで、ここに閉じこめられた。」
その言葉を聞き、レイアースの目が驚きで薄い緑色に変わった。
「私は薔薇だったから。…さっき父様が言ったとおり、薔薇は命を狙われるの。闇の人の手によってね。そのせいで、何もない真っ暗な部屋で、私は過ごすことになった。」
「でも、それって薔薇のせいじゃないんじゃ…。」
「薔薇のせいよ！だって、闇の人がいたって、薔薇じゃなかったら、そんな風に過ごさなくてもよかったの！全部、薔薇のせいだもん…。」
子供のようにイスフィールは繰り返した。
するとレイアースが、しゃがみこんでくしゃくしゃとなでた。
さっきとは少し違うような感情がこもっている。
「お前、やっぱり薔薇にそっくりだ…。」
レイアースの目は少しうるんでいて、明るい緑色になっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4969z/

楽園の薔薇

2011年12月17日21時46分発行